

## A-1 チュヴァシ語の後置詞 *valli* に先行する名詞・代名詞の格について

菱山 湧人 (東京外国語大学)

チュヴァシ語 (チュルク諸語オグル語群) の目的を表わす後置詞 *valli* 「(～の) ため」に先行する名詞・代名詞は、主格形・与対格形・属格形のいずれかとなる (例: *Petër valli* [PN.NOM ため] 「ピョートルのため」、*sana valli* [2SG.DAT/ACC ため], *san valli* [2SG.GEN ため] 「君のため」)。先行研究はそれぞれの出現頻度については記述していない。Pavlov (2014) は主格形以外が残存であることを示唆する記述をしているが、十分な根拠を示していない。本発表ではまず定量的調査の結果から、1) 名詞は主格形と与対格形が、代名詞は加えて属格形が現れうること、2) 名詞は主格形の出現頻度が高く、代名詞は与対格形の出現頻度が高いこと、3) 代名詞は種類によって、特に主格形と属格形の出現頻度が大きく異なること、を示す。次に本発表では、調査結果や先行研究の記述、同系言語や周辺言語との対照などに基づき、1) *valli* が後に発展した後置詞である可能性、2) 属格形は残存 (retention) であり、与対格形は改新 (innovation) である可能性、を提示する。

### 背景知識

他のチュルク諸語には *valli* に類似した形式の後置詞が見られず、*valli* に機能的に対応する後置詞 (トルコ語は *için* であり、他の多くのチュルク諸語もこれに類似の形式を持つ。ただし、*valli* とは異なり理由も表しうる) に先行する名詞・代名詞は主格形 (一部の代名詞は属格形) となる (例: トルコ語 *para için* [金.NOM ため] 「金のため」、*onun için* [それ.GEN ため] 「そのため」)。よってチュヴァシ語は、理由・目的のうち目的のみを表わす *valli* という形式の後置詞を持つ点に加え、与対格形の名詞・代名詞が先行しうる点で特異である。

### 本発表の構成

本発表の構成は次の通りである。まず第1節で先行研究の記述をまとめ、問題提起を行う。次に第2節で調査方法と調査結果について述べ、第3節で考察を行う。最後に第4節で今後の課題を挙げる。

なお、特にことわりのない限り、外国語文献の翻訳、ラテン文字転写<sup>1</sup>、例文番号、グロス、文字飾り、表、表番号は発表者による。

### 1. 先行研究

本節では、まず *valli* の語源および語義について Egorov (1964) と Andreev, Gorškov, Ivanov et al. (1985) (いずれも辞書) の記述を、次に Sergeev, Andreeva and Kotlev (2012) と Pavlov (2014) (いずれも参照文法) の *valli* に関する記述をまとめ、最後に問題提起を行う。

Egorov (1964) は *valli* の語源について、*valë* 「部分」と所有接辞 *-i* から形成された (*ë* が落ち、*l* が代償延長した) としている。

Andreev, Gorškov, Ivanov et al. (1985) には、*valli* のロシア語訳として、1) *dlja* (*kogo-čego-l*), *na* (*kogo-čto-l*) 「～(の) ため」、2) *k* (*kakomu-l. sroku, vremeni*) 「～までに」が挙げられている。1) の例として、

<sup>1</sup> ロシア語の音韻体系に従って発音される比較的新しいロシア語からの借用語のラテン文字転写は Timberlake (2004: 25) にある linguistic 方式に従う。異なる転写法であることを示すため、それらの借用語は斜字体で示す。

valli に先行する代名詞が属格形または与対格形の例（{*man / mana*} valli [1SG.GEN / 1SG.DAT/ACC} ため] “*dlja menja*”「私のため」、valli に先行する名詞が主格形または与対格形の例（{*yultaš / yultaš-a*} valli [仲間.NOM / 仲間-DAT/ACC} ため] “*dlja tovarišča*”「仲間のため」、valli に先行する名詞が主格形の例（*mašina* valli ukča pux- [車.NOM ため 金 集める-] “*otkladyvat’ den’gi na mašinu*”「車のためにお金を集める」）が挙げられている。2) の例としては、valli に先行する名詞が主格形の例（*šičč sexet valli kil-ěr* [七 時.NOM までに 来る-IMP.2PL] “*prixodite k semi časam*”「7時までに来てください」）が挙げられている。

Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012: 413) は valli について、「動作を誰／何のために行ったかを表わす。この後置詞の前の名詞は主格、代名詞は属格または与対格となる」と述べ、代名詞（与対格形）の例として *āna valli* [それ.DAT/ACC ため]「それのため」、*sire valli* [2PL.DAT/ACC ために]「君達／あなた(方)のため」を挙げている。

Pavlov (2014: 351) は、「チュヴァシ語では同じ後置詞を持つ異なる格形式は原則として、意味を区別する役割を果たさない」と述べ、3つの格と共に用いられる後置詞 valli を挙げている（例：*san valli* [2SG.GEN ため]、*sana valli* [2SG.DAT/ACC ため]「君のため」、*Petěr valli* [PN.NOM ため]「ピョートルのため」）。Pavlov (2014: 351-352) によると、後置詞構造における名詞の格は残存現象と関係しており、非意味論的な要素で、構造的な機能のみを果たすものであるという。Pavlov (2014: 352) は、「後置詞はほとんどの場合、斜格形とではなく、主格形とともに用いられる。これは、後置詞に共通の傾向とみなすことができる」と述べ、valli が主格形の名詞・代名詞と結びついた例（*Petěr valli* [PN.NOM ため]「ピョートルのため」、*věsem valli* [それ.PL.NOM ため]「それらのため」）を挙げている。

上述のように先行研究は、valli に先行する名詞・代名詞が、主格形・与対格形・属格形のいずれかであることについて記述しているが、それぞれの出現頻度については記述していない。Pavlov (2014) は、主格形以外が残存であることを示唆する記述をしているが、十分な根拠を示していない。

## 2. 調査

本節では、2.1 節で調査方法について述べ、2.2 節で調査結果を示す。

### 2.1. 調査方法

定量的調査と容認度調査を行った。定量的調査は、オンラインコーパス Čavaš čělxin ikčělxellě sūpsí<sup>2</sup> [チュヴァシ語二言語コーパス]（以下 CCIS）を用いて、以下の手順で行った。

- ① 検索窓に valli をキリル文字で入力して検索し、検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付ける。
- ② 検索ノイズを目視で除去しながら、名詞+valli の例と、代名詞+valli の例を 100 例ずつ抽出する。
- ③ 名詞・代名詞を、とっている格（主格・与対格・属格）ごとに集計し、統計分析<sup>3</sup>を行う。
- ④ 代名詞を種類別（再帰・指示・人称・他）に分け、とっている格（主格・与対格・属格）ごとに集計し、統計分析を行う。

<sup>2</sup> 総語数約 940 万語（2021 年 6 月 20 日現在）。タグなしコーパス。多くの例文にはロシア語の対訳が付いている。検索窓は一つのみであり、検索で記号を用いることはできない。2021 年 6 月現在、リアルタイムで更新作業（新テキストの追加、ロシア語訳付け作業）が行われている。新聞・雑誌の記事、ニュース、散文集、宗教関連のテキストなどを含む。以下、出典の明記されていない例は、CCIS から抽出されたものである。

<sup>3</sup> 統計分析はカイ二乗検定と残差分析を行った。有意水準は 1%とした。

加えて、定量的調査で抽出されなかった例が見られるかを確認するため、Google 検索で完全一致検索を行った（入力例：“эпир валли” (epir valli) 「私たちのため」）。

容認度調査では、インフォーマント<sup>4</sup>に発表者が作成した例を提示し、「容認可能」、「違和感がある (?)」、「容認不可 (\*)」のいずれかを選んでもらう形で容認度を調べた。

## 2.2. 調査結果

定量的調査の結果、1) 名詞は主格形と与対格形が、代名詞は加えて属格形が現れうること、2) 名詞は主格形の出現頻度が高く、代名詞は与対格形の出現頻度が高いこと、3) 再帰代名詞は他に比べて主格形の出現頻度が高く、属格形の出現頻度が低い一方、人称代名詞は他に比べて属格形の出現頻度が高く、主格形の出現頻度が低いこと、が分かった。定量的調査の結果は以下の表 1, 2 の通りである（特に顕著な値を太字で示す）。

表 1：後置詞 valli に先行する名詞・代名詞の格

	主格	与対格	属格	計
名詞	<b>96</b>	4	<b>0</b>	100
代名詞	21	<b>60</b>	19	100

表 2：後置詞 valli に先行する代名詞の格

	主格	与対格	属格	計
再帰	<b>15</b>	23	<b>0</b>	38
指示	4	21	7	32
人称	<b>0</b>	15	<b>10</b>	25
他	2	1	2	3
計	21	60	19	100

表 1 についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた ( $\chi^2(2) = 116.08, p < .01$ )。残差分析を行ったところ、名詞では主格形の出現頻度が有意に高く、代名詞では与対格形の出現頻度が有意に高いことが示された ( $p < .01$ )。表 2（「他」の行は除く）についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた ( $\chi^2(4) = 27.11, p < .01$ )。残差分析を行ったところ、再帰代名詞では主格形の出現頻度が有意に高く、属格形の出現頻度が有意に低い一方、人称代名詞では属格形の出現頻度が有意に高く、主格形の出現頻度が有意に低いことが示された ( $p < .01$ )。

容認度調査の結果も、定量的調査の結果と概ね一致している。以下、定量的調査および容認度調査の結果を、名詞と代名詞（再帰代名詞、指示代名詞、人称代名詞、その他）に分けて詳述する。

### A. 名詞

定量的調査では、属格形の名詞は抽出されなかった。ただし、Google 検索の結果、複数形の名詞が属格形で現れた例 (ača-sen valli [子供-PL.GEN ため]「子供たちのため」など) がヒットした。与対格形の名詞は 100 例中 4 例抽出されたが、いずれも人間を指す名詞の複数形であった (komsomolec-sene valli [共産青年同盟員-PL.DAT/ACC ため]「共産青年同盟員のため」、kolxoznik-sene valli [コルホーズ農民-PL.DAT/ACC ため]「コルホーズ農民らのため」、šin-sene valli [人-PL.DAT/ACC ため]「人々のため」、xalāx-sene valli [人々-PL.DAT/ACC ため]「人々のため」)。ただし、Google 検索の結果、人間以外を指す単数形の名詞が与対格形で現れた例 (yal-a valli [村-DAT/ACC ため]「村のため」など) もヒットした。

<sup>4</sup> 1999 年生まれでロシア連邦チュヴァシ共和国出身のチュヴァシ語母語話者の男性 A. G. 氏。

容認度調査の結果も、定量的調査の結果と相関している。与対格形は、複数形の名詞の場合は容認度が高かったが、単数形の名詞の場合は容認度が低かった (*student-sene valli* [学生-PL.DAT/ACC ため]「学生たちのため」、<sup>?</sup>*pěr student-a valli* [一 学生-DAT/ACC ため]「ある学生のため」)。自然な表現としてインフオーマントは、主格形の例 (*pěr student valli* [一 学生.NOM ため]「ある学生のため」) を挙げた。属格形は、名詞が単数か複数かに関わらず容認度が低かった (<sup>?</sup>*student-sen valli* [学生-PL.GEN ため]「学生たちのため」、<sup>?</sup>*pěr student-än valli* [一 学生-GEN ため]「ある学生のため」)。

## B. 代名詞

### a. 再帰代名詞

定量的調査の結果、属格形の再帰代名詞は抽出されなかった。Google 検索の結果、属格形の例は *xäy-ën valli* [自身.3-GEN ため]「それ自身のため」、*xäy-sen valli* [自身.3-PL.GEN ため]「それら自身のため」、*xäv-än valli* [自身.2SG-GEN ため]「君自身のため」が数例ずつ、*xam-än valli* [自身.1SG-GEN ため]「私自身のため」が 1 例ヒットした。

容認度調査の結果、属格形は容認度が高く、定量的調査の結果とは一致しなかった (*{xäy-ën / xäy-sen / xam-än} valli* [*{*自身.3-GEN / 自身.3-PL.GEN / 自身.1SG-GEN*}* ため]「*{*それ自身の / それら自身の / 私自身の*}* ため」)。

### b. 指示代名詞

定量的調査の結果、32 例中 4 例が主格形であったが、いずれも複数形の *věsem valli* [それ.PL.NOM ため]「それらのため」であった。Google 検索の結果、単数形の例は *šakä valli* [これ.NOM ため]「このため」が 1 例ヒットした。

容認度調査の結果、主格形は単数形の場合に容認度が低かった (<sup>?</sup>*{ku / vāl} valli* [*{*これ.NOM / あれ.NOM*}* ため]「*{*この / あれの*}* ため」)。

### c. 人称代名詞

定量的調査の結果、主格形の人称代名詞は抽出されなかった。Google 検索の結果、*epir valli* [1PL.NOM ため]「私たちのため」が 1 例ヒットした。

容認度調査の結果、主格形の人称代名詞はいずれも容認度が低かった (<sup>?</sup>*{epě / esě / epir / esir} valli* [*{*1SG.NOM / 2SG.NOM / 1PL.NOM / 2PL.NOM*}* ため]「*{*私の / 君の / 私たちの / 君たちの*}* ため」)。

### d. その他

定量的調査の結果、疑問代名詞 *měn*「何」の例が 2 例 (いずれも主格形の *měn valli* [何.NOM ため]「何のため」)、不定代名詞 *pur*「全て、皆」の例が 3 例 (与対格形の *purne valli* [全て.DAT/ACC ため]「皆のため」が 1 例、属格形の *purin valli* [全て.GEN ため]「皆のため」が 2 例) 抽出された。Google 検索の結果、疑問代名詞 *měn*「何」が与対格形で現れる例 *měn-e valli* [何-DAT/ACC ため]「何のため」は数例ヒットしたが、属格形の *měn-ën valli* [何-GEN ため] は抽出されなかった。不定代名詞 *pur*「全て、皆」が主格形で現れる例 (*pur valli* [全て.NOM ため]「皆のため」) はヒットしなかった。

容認度調査の結果、疑問代名詞 *měn*「何」の属格形は容認度が低かった (<sup>?</sup>*měn-ën valli* [何-GEN ため])。一方、不定代名詞 *pur*「全て、皆」の主格形は容認度が高かった (*pur valli* [全て.NOM ため])。

### 3. 考察

本節では、調査結果や先行研究の記述、同系言語や周辺言語との対照などに基づき、1) *valli* が後に発展した後置詞である可能性、2) 属格形は残存 (*retention*) であり、与対格形は改新 (*innovation*) である可能性、を提示する。

*valli* は、1) 他のチュルク諸語の機能的に対応する後置詞と同源の接辞 *-šÄn*<sup>5</sup> が存在すること、2) 形が規則的であることから、後に発展した後置詞であると考えられる。接辞 *-šÄn* は、Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012), Pavlov (2014) などの参照文法では「新しい格」の一つ (理由目的格) であるとされており、これに先行する一部の代名詞は、他のチュルク諸語の機能的に対応する後置詞と同様に、属格形となる (例: *šav-än-šän* [それ-GEN-PURP] 「そのため」)。Pavlov (2014: 359) は、「チュルク諸語では、理由・目的の関係は主に後置詞 *ičün* (*üčün*) によって表されるが、チュヴァシ語でそれは歴史的に屈折接辞の理由目的格 *-šÄn* に変化した」としている。これらのことから、*valli* は古い後置詞の接辞化を受けて、理由と目的のうち目的のみを表わす後置詞として、後に発展したものである可能性がある。*valli* の形が規則的であることも、これが後に発展したものであるという説を支持する。

先行する名詞・代名詞の格形式のうち属格形は、1) 分布が基本的に一部の代名詞に限られること、2) *valli* の起源 (*valë* 「部分」 + 所有接辞 *-i*)<sup>7</sup>、3) 他のいくつかの後置詞 (*pek* 「(～の) ような」、*pirki* 「(～の) せいで、(～に) ついて」、*xışšän* 「(～の) あと」など) に先行する一部の代名詞も属格形となることから、Pavlov (2014: 351) が述べる残存に該当すると考えられる。属格形が残存であることは、チュルク諸語における後置詞の形成過程に関する Johanson (1998) の記述からも支持される。Johanson (1998: 112-113) は、チュルク諸語における後置詞の形成過程について次のように述べている。まず、二つの語彙的要素が属格構造で結びつく (例: トルコ語 *ev-in ön-ün-de* [家-GEN 前-3.POSS-LOC] 「家の前で」)。次に、再分析により二つ目の要素が文法的関係を表わす要素へと発展し、属格を落とすことが可能となるか、(代名詞を除いて) 属格が使用できなくなる (例: トルコ語 *ev(-in) ön-ün-de* [家(-GEN) 前-3.POSS-LOC] 「家の前で」)。続けて Johanson (1998: 113) は、*üčün* 「(～の) ため」などの古い分析不可能なチュルク語の後置詞も似たような語彙的起源を持つように思われるとし、それらがいまだに格を支配する (例: トルコ語 *sen-in için* [2SG-GEN ため] 「君のため」) と述べている。Korkmaz (1962: 35) によると、他のチュルク諸語の機能的に対応する後置詞は *uçın* (< *uç* 「理由」 + 所有接辞 *-i* + 副詞派生接辞 *-n*) を起源としており、*valli* (< *valë* 「部分」 + 所有接辞 *-i*) と同じく所有接辞を含む。

Johanson (1998: 112-113) の記述に基づくと、主格形は主に名詞で属格形に取って代わったと考えられる。一部の代名詞 (再帰代名詞、指示代名詞の複数形、疑問代名詞) も主格形で現れうるが、これは他の一部の後置詞や、他のチュルク諸語の機能的に対応する後置詞に先行する場合も同様である (例: {*vësem / xam / mën*} *pirki* [{それ.PL.NOM / 自身.1SG.POSS.NOM / 何.NOM} ついて] 「{それら / 私自身 / 何} について」、トルコ語 {*onlar / kendi-m / ne*} *için* [{それ.PL.NOM / 自身-1SG.POSS.NOM / 何.NOM} ため] 「{それら / 私自身 / 何} のため」)。

<sup>5</sup> 交替する部分を大文字で表した代表形。母音調和による異形態 *-šän, -šën* を持つ。

<sup>6</sup> *valë* 「部分」に所有接辞 *-i* が後続して *valli* となるのは、単子音 + 弱化母音 *ä, ë* で終わる二音節語に母音始まりの接辞が後続した場合に、弱化母音が落ち、直前の子音が重子音化するという規則 (例: *yurä* 「歌」に所有接辞 *-i* が後続すると *yurri* 「その歌」となる) に沿っている。

<sup>7</sup> 所有接辞は、主に属格の名詞・代名詞に限定された名詞に現れる (例: *unän kënek-i* [それ.GEN 本-3.POSS] 「その本」)。

一方、与対格形は、1) 分布が代名詞に限られないこと、2) 先行する名詞・代名詞が主格形または属格形となる他の後置詞の場合は、一部の後置詞 (may 「(～の) ついでに」、urlä 「(～を) 通って」、täräx 「(～に) 沿って」など) で稀にしか見られないこと、3) 他のチュルク諸語の機能的に対応する後置詞の場合は与格形が見られない一方、隣接して分布するマリ語 (ウラル語族フィン・ウゴル語派) の機能的に対応する後置詞の場合は与格形が見られることから、残存ではなく改新であると考えられる。Riese et al. (2017: 477-478) によると、マリ語の後置詞 *verč(ən)* 「(～の) ため」 (ただし *valli* とは異なり理由も表しうる) は、主格形 (代名詞の場合は属格形)、与格形の名詞類と共起する (例: {*oksa/oksa-lan*} *verč* [{金.NOM/ 金-DAT} ため]「金のため」)。チュヴァシ語とマリ語の類似は言語接触によるものであろうが、そのプロセスを解明するにはさらなる調査が必要である (第 4 節を参照)。まずチュヴァシ語で与対格形が現れたと仮定すると、その要因としては、*valli* が標示する利益者 (beneficiary) と、与対格が標示する受領者 (recipient) が意味的に近いことが挙げられよう。与対格が改新で、その出現に意味的要因が関わっているとすれば、「後置詞構造における名詞の格は残存現象と関係しており、非意味論的な要素で、構造的な機能のみを果たすものである」という Pavlov (2014: 351-352) の記述は、必ずしも当てはまらない場合があるということになる。

#### 4. 今後の課題

今後の課題としては、接辞 *-šÄn* との相互関係、与対格形が名詞よりも代名詞で多く見られる理由、単数形の名詞よりも複数形の名詞で与対格形の頻度・容認度が高い理由、チュヴァシ語とマリ語の言語接触のプロセスの解明などが挙げられる。

マリ語の後置詞 *verč* に先行する名詞・代名詞の格に関しても定量的調査<sup>8</sup>を行ったところ、以下の表 3, 4 に示すような結果が得られた (特に顕著な値を太字で示す)。

表 3: 後置詞 *verč* に先行する名詞・代名詞の格

	主格形	与格	属格	計
名詞	<b>97</b>	3	<b>0</b>	100
代名詞	23	11	<b>66</b>	100

表 4: 後置詞 *verč* に先行する代名詞の格

	主格	与格	属格	計
再帰	<b>6</b>	0	<b>0</b>	6
指示	1	3	<b>48</b>	52
人称	<b>0</b>	8	<b>16</b>	24
他	16	0	2	18
計	23	11	66	100

チュヴァシ語 (表 1, 2) と比べると、名詞はほとんどが主格形であり、わずかに与格形が見られる点が共通している (与格形の例: *diplom-lan verč* [証書-DAT ため]「証書のため」)。一方、代名詞は、チュヴァシ語と比べて属格形の割合が有意に高く、与格形の割合が有意に低い ( $\chi^2(2) = 59.90, p < .01$ )。再帰代名詞は他に比べて主格形が多く属格形が少ない一方、人称代名詞は他に比べて属格形が多く主格形が少な

<sup>8</sup> マリ語のオンラインコーパス Meadow Mari Corpora の Main Corpus (総語数 263 万語のタグ付きコーパス、メディアとウィキペディアの記事を収録) を用いて、次の手順で調査を行った。①検索窓 1 に名詞を意味するタグ N もしくは代名詞を意味するタグ PRO を入力する。②次の検索窓の要素との距離を 1-1 として、検索窓 2 に *verč* をキリル文字で入力して検索し、検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付ける。③検索ノイズを目視で除去しながら、名詞+*verč* の例と、代名詞+*verč* の例を 100 例ずつ抽出する。④名詞・代名詞を、とっている格 (主格・与格・属格) ごとに集計する。⑤代名詞を種類別 (再帰・指示・人称・他) に分け、とっている格 (主格・与格・属格) ごとに集計する。

い点は共通している(例: *ške-ž verč* [自身-3SG.POSS.NOM ため]「彼自身のため」、*memnan verč* [1PL.GEN ため]「私たちのため」)。チュヴァシ語における与対格形の割合が、マリ語における与格形の割合に比べて高いことから、改新がチュヴァシ語で起こり、言語接触でマリ語に影響した可能性が考えられる。しかし、この頻度の差には、マリ語の後置詞 *verč* がチュヴァシ語の後置詞 *valli* とは異なり、目的だけでなく理由も表すことが影響している可能性もあり、今後の精査が必要である。

## 略号一覧

1, 2, 3		1, 2, 3 人称	PL	plural	複数
ACC	accusative	対格	PN	person name	人名
DAT	dative	与格	POSS	possessive	所有
GEN	genitive	属格	PURP	purposive	目的
IMP	imperative	命令	SG	singular	単数
NOM	nominative	主格	-		接辞境界

## 参考文献

- Andreev, I. A., A. E. Gorškov, A. I. Ivanov et al. (1985) *Čuvaško-russkij slovar'*. [チュヴァシ語・ロシア語辞書] Moskva: Russkij jazyk.
- Egorov, V. G. (1964) *Čavaš čělxin etimologi slovarě*. [チュヴァシ語語源辞書] Šupaškar: Čavaš këneke izd-vi.
- Johanson, L. (1998) History of Turkic. In: L. Johanson and É. Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*, 81-125. London, New York: Routledge.
- Korkmaz, Z. (1962) uçun ~ üçün ~ için vb. Çekim Edatlarının Yapısı Üzerine. [後置詞 uçun ~ üçün ~ için などの構造に関して] *Türk Dili Araştırmaları Yıllığı - Belleten*, 9: 31-35.
- Pavlov, I. P. (2014) *Sovremennyj Čuvaškij jazyk: monografija: v 2 tomax. Tom 2: Morfologija*. [現代チュヴァシ語: モノグラフィー 第2巻: 形態論] Čeboksary: Čuvaškij gosudarstvennyj institut gumanitarnyx nauk.
- Riese, T., J. Bradley, E. Yakimova and G. Krylova (2017) *Oñaj marij jəlme: A Comprehensive Introduction to the Mari language*. Vienna: University of Vienna.
- Sergeev, L. P., E. A. Andreeva and V. I. Kotleev (2012) *Čavaš čělxi: čavaš filologi fakul'tečën studenčesem valli xatërleñë vērenü këneki*. [チュヴァシ語: チュヴァシ文献学部の学生向けの教科書] Šupaškar: Čavaš këneke izd-vi.
- Timberlake, A. (2004) *A reference grammar of Russian*. Cambridge University Press.

## 調査資料

- Čavaš čělxin ikčəlxellə šüpši [チュヴァシ語二言語コーパス] (<http://corpus.chv.su/>) [最終閲覧日: 2021/7/12]
- Meadow Mari Corpora (<http://meadow-mari.web-corpora.net>) [最終閲覧日: 2021/7/12]